キリスト者の戦時下日記

——手塚縫蔵と森下二郎について——

宮沢正典

一　はじめに
二　戦時下日記
　1　戦時下日記の三類型
　2　日中戦争観
　3　『嘉信』との関係
　4　対英米戦争観
　5　敗戦期の姿勢
三　結び

一　はじめに

手塚縫蔵と森下二郎はほぼ同時代に長野県において小学校教師として社会に歩みはじめた。両者は就任から最終的な退任までの間に数回の休職ないし辞職で中断するなど、平坦でなかったことや、すぐれたクリスチャン教師としてその影響力をもったことにも類似が見出せる。そのほかにも教職を退いてから一人は教会活動、もう一人は農耕生活

と形は違っても、ともに本来希求した生き方をして生涯を閉じたことも似ていた。

手塚は休職中の二回はともに東京神学社に走り、植村正久から伝道者になることを強く勧められたが、教職に復帰して、校長としてはもちろん聖書研究会などを通して信州の教育界に多大の影響を与えた。松本日本基督教会（独立）はかれの聖書研究会にルーツをもつ。森下はトルストイ、ソローに魅せられた時期もあり、任地のどこにいても農業と祈りに没頭できる生活を希求していた。(1)

手塚と森下のそうした類似ないし共通項はずいぶん多いが、長野県のしかも主として南信の狭い教育会にありながら、また両者は互いに存在を知っていたことは確かだが、顔を合わしたことも同席したことさえもなかったのではないかと思われるほどに関係が薄かったと言っていい。少なくともある期間松本市において深くかかわりうる条件をもっていたはずであった。それにもかかわらず両者は近接したところで平行線を保った。このことは両者の境遇、資質、姿勢などの相違からくるものであると同時に、いまとりあげようとする昭和戦時下において類似や共通項を消去し、両極に分離したと言ってもいいほど鮮明に表出する。私はかつて「手塚縫蔵について」（『日本の近代化とキリスト教』一九七三年、新教出版社、所収）において手塚の人と思想についてとりあげた。本稿では多少重複するが、その手塚と森下の公刊された戦時下日記を主たる拠として両者の共通項と両極性の問題を考えてみたい。但し、公刊された日記はともに編者による抄録であり、森下については「森下日誌を読む会」（長野県下伊那郡鼎町上山・清水はな方）による別の抄録で多少補うことができたが、いずれもその範囲内であることを断っておきたい。

手塚縫蔵（一八七九年一月一二日生―一九五四年八月一六日没）と森下二郎（一八八五年九月九日生―一九六二年六月二七日没）

は七歳ちがいである。両者はともに農家の長男であり、信州で教師となり、享年は七五と七六であった。手塚は長野県東筑摩郡広丘村（現在塩尻市広丘）に生れ、一九〇二年長野県師範学校を卒業、東筑摩郡和田尋常高等小学校訓導となった。森下は上伊那郡上片桐村（現在下伊那郡松川町上片桐）に生れ、一九〇九年東京高等師範学校国語漢文科を卒業、飯田尋常高等小学校訓導となった。兵役はその最初の年度に師範学校卒業者に対する短期六週間現役兵として、それぞれ歩兵第一五聯隊（高崎）と歩兵第六〇連隊（豊橋）に入営したが、それ以後は服役を課されたことはなかった。昭和戦時下では兵役年齢を免れていたが、身近な肉親を戦争で失ったことは後述する。中等学校レベルの師範卒の手塚と、飯田中学校を経た高師卒の森下が、ともに二三歳であったのは、手塚がその分師範入学前に家業を助けたり小学校の授業生を勤めたからである。

森下は上片桐村有数の地主の出身であり、とくに父信之輔の死後は二〇代で戸主となり、家督を担わなくてはならなかった。妹の一人は、森下が「長男であったため、昔の因襲と両親の弱かったためとで、自分の思いのままに進む事ができず、ひとり煩悶しておられ、そういう境遇のため、家を離れることができず、遂に家から通える飯田小学校に教鞭をとる身となった」と回想している。(3) 一九一二年三月に至近の上片桐尋常高等小学校に転じ、その九月には退職して一家の経営に当たることになった。一九一七年上片桐小の校長として教育界に復帰し、次いで伊那実科女学校、飯田高等女学校に勤めたが、一九二四年には再び退き、上片桐村助役に就任した。一九二七年に初めて遠隔の長野高等女学校に赴任することになったのは飯田高女時代の校長樋口長衛の赴任説得と、弟三郎を養子として家の経営を託すことができたからであった。長野県実業補習学校教員養成所および長野県師範学校の教頭を経て、一九三三年松本高等女学校校長に就任し、四〇年まで在任した。この七年間は、晩年の帰農時代を除いてもっとも長い。松本時

代以後は後述する。恒産が森下を縛り、同時にそこへ求めて帰っていった軌跡のなかでいかにもかれらしく生きた。

手塚には、家庭的不幸がその生涯に悲愴感をいだかしめるものがある。一三歳のとき家屋全焼から非運に向かう。この後親戚の経営していた水車屋を引き継ぐが、これも出水で流出し一家の困窮生活が決定的となった。加うるに、教職に就いてからも自らの重患を経験しながらのあいつぐ肉親の喪失は人として耐えがたいものであったにちがいない。一九二七年長女みすゞ（一四歳）、一九三〇年二男雄二郎（一九歳松本中学校在学中）、一九三二年長男正一（二二歳東京帝国大学在学中）、一九三五年妻千代（四八歳）、四男信男（一八歳松中在学中）、一九四一年三男健三（二六歳応召中発病）、一九四三年母ぬい（八八歳）を亡くし、ともに終戦を迎えたのは次女みさをだけであった。「男子にして涙あり」、「思ひ煩ふ勿れ主は近きにあり」と祈り感謝し、ある葬儀では「粛として朗か也、寂として悲しけれども高らかに讃美也」と述べたという。[4] 手塚は一九三六年春に教職を去るまでの間に三回休職している。その原因は森下が恒産に縛られ忸怩とした断続ぶりとは異なり、手塚にはいさぎよい毅然たる出所進退と呼ぶべき理由があった。[5] そこにも手塚らしい生き方がよく表出している。かれを旧約のヨブにたとえる人のあるのも当然と思わせる。[6]

キリスト教入信は二人とも二〇代である。

手塚は長師時代、高木信吉牧師の旭町日本基督教会に出席、宣教師スカッターのもとにも通ったが、卒業の直前二三歳で受洗した。かれは前にも触れたように神学社に学んだが、同時に内村鑑三ら無教会の影響も受けた。矢内原忠雄との深い関係については私も別に触れた。[7]

森下は飯中時代に先輩のクリスチャンとの交友によってキリスト教に接触したとされるが、初めて聖書を手にしたのは一九歳のときであった（日記、一九四三年二月四日）。続く高師時代に教会に出席した形跡はない。[8] 教職についてか

ら飯田で小林洋吉、フィンランド人宣教師サロネン、ヒュトネンらに教えを受け、二七歳のとき飯田町福音ルーテル教会においてサロネンから洗礼を受けた。その時期に上片桐の自宅などで「聖書の会」を催したことがあったが、以後はそうした集りをもったことはないし、教会に出席した形跡もない。森下は「教会的キリスト教は受け入れがたかった」[9]と述べているが、かれのキリスト教信仰への道は次のように辿れる。聖書を読むに到った経路を国木田独歩→ワーズワース→聖書とし、それのみが聖書を読ませた原因ではないが「茲に到って私の読書は、思ふに世界最高の思想に辿り附いたと云ふ事が出来ませう。私はひそかに、この読書の順序は誠にありがたい順序であったと思ってゐます」[10]。他方、高山樗牛→日蓮、樗牛→親鸞（歎異抄）・キリスト（聖書）を通しても聖書に到ったが、樗牛によって学んだ世界四聖（孔子、釈迦、ソクラテス、キリスト）の一人であったキリストは、森下において次のように転化する。「しかし私は聖書の読解其他の経験によって、キリストは聖人といふもの以上であることを識りました。キリストは神の子です。真の神です。これは世界最高の思想であるは勿論、実に宇宙唯一つの確実なる真理であると信じます。かうわかりました事はまことに有難いことでありまして、読書ばかりがかうしてくれたのだと思ひませんけれども、かういふ風にゆく様な順序に読書の出来たことに対して、今は感謝の思ひに溢れてゐます」[11]と。青年期の精神的な成長の過程できわめて知的かつ倫理的に把握されたキリスト教であり、その確信を生活のなかに深く沈潜させていくものであって、他から強いられるものでも他に強いるものでもない。それが森下の信仰と生活を支配する原理であって、「静」の人として特徴づけるのにふさわしい。

手塚は在職中はいうまでもなく、休職中にも休むことなく、むしろその時を生かす機会とする「動」の人であった。手塚を語る人びとがかれの多彩な交友はかれの人間を形成したと指摘するのは当たっている。事実、相手が大

臣、天下の名士であろうと病める同信の老人であろうと、失意の青年であろうと、かれは直ちに出かけた。この行動の迅速さは、同時に状況や時局に対応する迅速さにもあらわれる。動かない深い祈りと確信がささえていたとしても「動」の人そのものであった。

二　戦時下日記

1、戦時下日記の三類型

灯台社の村本一生はその信仰から軍隊内で悩みぬいた果てに脱柵（脱走）をはかり、さらに銃器返上をやってのけた。かれは軍法会議で裁かれた後、陸軍刑務所に服役するが、その思想的信条を変えず獄中の『手記』においても屈していない。そして服役後にはもっと苛酷な憲兵、特高、民間刑務所などによる迫害が待ちうけていたが、かれはそれらに耐え、いわば内と外との不一致ないしギャップはなかった。[13] これをA型とする。

昭和戦時下の日記としてよく知られる清沢洌の『暗黒日記』は、その内容を特高に摑まれたとしたら、かれ自身葬られたに違いない。事実かれは日記帳の扱いに細心の注意を払っていた。[14] そこでは自ら内なるもの（日記）と外に表われるものとのギャップは免れない。これを仮にB型とする。

時代状況のなかで自己規制あるいは韜晦によって内と外とのギャップを埋めようとする自覚的営みがなされた場合は、状況そのものと一致し、元来ギャップの存在しない場合とは厳密には区別されなければならないが、ここでは両者を含めてC型として分類しておく。

さて、右のA型は村本の場合のように不可能ではないまでも希有のケースであり、手塚にも森下にももちろん該当

しない。森下は公立学校の責任の地位にある者として、言論人清沢とは同一ではないとしても、B型に類する日記を書き続けた。とくに松本高女校長時代にその内と外との相剋はもっとも大きかった。手塚の場合は信仰一途に生きた記録であり、あげつらえば当局の意図に抵触するところがないわけではないが、大局においてC型に分類できよう。手塚の漢詩、和歌などはすべて公にされたものか否かは明らかではないが、前記『遺稿集』では日記、書簡中からとられたとあり、[15] もしこれらを日記、手記に準じると見るならばC型への傾斜は強まる。それらはかげりのない天真の時局讃歌と看做しうるものが多く、とうてい韜晦がなされたとは解しがたい。

2、日中戦争観

手塚と森下の日記抄中には、蘆溝橋事件の勃発した一九三七年中の時局にかかわる記述は少ない。手塚は七月八日の日記の末尾に「日支小紛」とだけ記し、次は九月一五日の記述中に「満洲国独立満五年也。神果して喜び給ひつつありや、アーメン」とあり、「太原爆撃、米政府輸出禁止亜孟」で結んでいる。一一月七日に田川大吉郎を迎え、かれの「国民精神動員と国民の精神的動員」と題する講演について「君ケ代、聖書、祈祷、余開会辞」、そして約五〇〇名の会衆のあったことを記し、それらを「よし、アーメン。あゝ君よ、神よ、アーメン」で結んでいる。他方、森下は一二月一九日に「中支に出征せる弟三郎、戦傷の報あり。詳細は不明なり。正義の戦といい、平和の為めの戦という。果して左様な戦があり得るであろうか」と記している。

この年の一二月一三日、日本軍は南京を占領した。手塚は同月一七日「南京入城」と題する次の二つの詩をつくっている。

江南万百里　掲日満天兵　俠骨香仁愛　皇軍入大京

大日映旌旗　秋晴断戦雲　南京城外路　粛々仰皇軍

翌一九三八年元旦には次のように詠んだ。

瑞恒朝粛々　拝祷仰高明　日本神邦也　東天観聖兵

その翌年、日中戦争第三年を「聖戦三たびの元日」、「聖戦第三年」（七月七日）、「懸軍、三たびの聖日」（クリスマス）と繰り返し、一九四一年の日米開戦後も手塚のこの戦争を呼ぶ用語として「聖戦」が定着している。

森下も、一九三九年三月『松本高女校友会報』（第一二号）において、手塚と同じく「聖戦」をうたっている。外なる森下である。

今次の日支事変は聖戦であります。神国日本の皇道を世界に宣布し、八紘一宇の大理想を実現せしむべき重大時期であります。之を以て東亜の安定を期し、ひいて世界の平和に寄与せんとするのであります。この尊い国家の事業に参加する吾等は非常の覚悟を以て此目的貫徹に邁進しなければならないのであります。

しかるに、内なる森下は次のように書く。

今度の戦争が東洋平和のための戦争であり支那を愛するが故に支那を討つのであり、皇祖の御理想たる八紘一宇を実現することであり、従ってこれは聖戦であるという。

自分も今まで幾度かこれを言わなければならない時が出来て、このことを口に唱えて来た。

しかし自分にはこのことの明らかな自覚信念があって言っているのではない。いやそればかりでなく、これらのことはみんな疑わしく、みんな信ぜられない。東洋平和のために東洋の平和を破りつつある。破った結果において平和が、永遠の平和が来るのだという。そんなことは信ぜられない。むしろ東洋永遠の禍乱の種を蒔きつつあるという方が当っているように思われる。いわんや支那を愛するが故に支那を討つなどということがどうして信ぜられようぞ。

いわゆる八紘一宇の御理想なるものは果して今の政治家、軍人および時勢に順応するに敏なる学者の唱えるようなものだろうか。もし彼らの言うがごとき世界征服の野望のごときものがわが建国の理想であるとするならば、余はかくのごとき理想を持ち得

ざるものである。従って余はこの戦争が聖戦であるとは信ずることができないのである。（日記、一九三九年一一月五日）

これに類する記述が顕著になり、一九四〇年一月には次の歌がある。

三年にして三百万の死傷者をいだせしといふ戦を哀しむ
国を挙げて聖き戦といふものをわれのみ心得ざる哀しき
支那の国の民は憎まず慈むといふ死傷三百万は民にあらじか
同胞を敵となして殺しつゝ永き和を求むるといふ
土地を取り主権を犯す心なしといふまこと然らば何の戦ぞ（日記、一月一二日）

飯田小訓導時代からの友人西尾実は、森下の妻よしゑの思い出を次のように紹介している。

あのころは、学校から帰ってきて、「今日も、また、生徒たちに心にもないことを言ってしまった。自分の考えとうらはらなことを言って聞かせた。」といって苦悶していた。（中略）「おれはいまにひっぱられるかも知れない」と妻にもらしていた。[16]

外と内とのこうしたギャップが森下を苦しめ、一九四〇年三月一五日卒業式を前にして松本高女校長を依願退職した主因とする見解は一致しているようである。（西尾実「森下二郎を語る」『伊那』一九七三年二月号、伊那史学会刊。西尾実「森下二郎の人と思想――まえがきにかえて」清水義穂「森下二郎の日記について」ともに『神と愛と戦争・あるキリスト者の戦中日記』所収）但し、森下自身「三月一五日に依願退職した」と四月九日の日記に記しているが、三月一五日に退職を申し出たのであったのか、またそれが卒業式直前であったのかは疑問が残る。『長野県松本蟻ケ崎高等学校七十年史』でも「卒業式直前」としている（同書、二七九ページ）が、そのもたらしたであろう波瀾にまったく言及していない叙述法は気になる。私が一九八一年一一月六日によしゑ夫人におあいしてうかがったところでは、それが卒業式前であったという認識はしておられなかった。これらの点については公文書などに当たり後日を期したい。その年の『松本

高女校友会報』第一三号に森下は「思ふところ」と題して最後の辞を寄せた。文中「小人は我身を楽くして道を乱すなり。君子は我身を責めて道を道とするなり」、「己を責めずば道はなきものと知るべし」という沢庵の言葉を引用して、その心中を示唆する感慨を述べている。[17] 事実、退職後の日記は在職中の重苦しい雰囲気が薄れているのが読みとれる。しかし、同年七月には弟三郎の負傷に続く次の弟四郎の戦死の報を受け「不堪痛惜」(日記、七月一四日)と書き、戦争批判の姿勢は変っていない。

森下は松本高女を辞すと、四月には東京に転住し、東京盲学校および失明傷痍軍人教育所の教授嘱託となった。子供のない森下は三郎の長男信一郎を熱愛し、[18] かれのもとに寄留して松本二中を卒業し、東京農大に進学する信一郎の面倒を見てやるためでもあった。森下をあわてさせたのは、普通恩給で生活をするつもりであったのが、規定年限一七年に九ヵ月不足するという長野県からの通知であった。「自分の軽卒な過去のやり方が悔まれて悲しくなさけなくもある」(日記、一九四一年一月九日)とあがく森下は、「聖者森下」観[19]への思いがけぬ人間森下の顔を見せる。しかし、かれは同じ日に続けて「救主キリスト・イエス」が「頼むべからざるものに頼っていたのを叱って、真に頼むべきものを現わし給うたものにちがいない。誠に有難い事である」と記した。

ともあれ、森下は東京での生活を中断して、同年四月から四三年三月までの二年間、諏訪中学校および商業学校教諭に単身赴任し下宿生活を送る。校長から教諭になるため高等官三等から五等への降等も承諾する。ここでは明らかに補助者的な姿勢がみられる。東京時代からこの時期にかけて顕著なことは、人生的読書に加えて聖書研究への没頭と農業書への関心である。「農業がやりたい。かく思いながら、遂に実現する事が出来なくて終るのであろうか」(日記、一九四一年一〇月六日)という思いがいつも支配していた。諏訪時代の末期には、「聖書及び聖書に関する書物

以外のものにはまるで興味がなくなってしまった」と書き、「祈祷を以て、聖書の真理を啓示し給わん事を祈って研究を進めて行こう」（日記、一九四三年二月四日）という決意を述べている。

一方の手塚の日記は、極めて簡潔に記され感謝と祈りの言葉で始まり、祈りの言葉で結ばれており、森下のような時局と自己との背馳、外と内との相剋に悩む孤独な弱さはない。日米開戦まででは、近衛文麿への通俗的期待感から「近衛体制は軍部と財閥とを制するに在り。これ国家の賊なれば也、アーメン」（日記、一九四〇年七月九日）および「唯物無神は遂に破れ去らんとす、亜孟々々。この夜防空当番の由、愚劣なる極みとす。アーメン」（日記、一九四一年一〇月一四日）の二か所に強い時局批判の記述がみられる。しかし、同時に「支那大陸を祈る。天軍百万を祈り奉る。日本の政府を祈る、亜孟々々」（日記、一九三九年六月一七日）と書いているが、その文脈の重点は「祈り奉る」のところにないだろうか。歌はもっとそのことを明瞭に物語る。

天軍百萬今漢口に降るなりすめらあじあの御こともちはや
征く兵の一人一人に天つ神先ちるますありがたきかな
たゝかひは御旨なりけりかしこみてあなどる勿れおそるゝ勿れ（一九三八年）
日の本は神の国也げにつゆも神の御旨を疑ふなゆめ
聖戦は明かにかつ日本はげに神国の名にし負へれば（一九三九年）

むしろもっとも痛切を覚えるのは、残された三男健三についての記述である。一九三九年三月二〇日の「立大証書授与式。午後二時はるかに祈る、アーメン。優等也」に始まり、召集令状（一九四〇年三月八日）、壮行会、入隊、幾度かの面会、発病除隊、病勢に一喜一憂しついに一九四一年六月三日の「この日健三逝く六時廿五分」にいたる手塚の記述は、慟哭をおさえて簡潔だが、かれの悲しみを一層強烈に印象づける。

森下は学徒出陣する信一郎の入営に松本まで付添う。この一九四三年一〇月前後から、東京世田谷の陸軍機甲整備学校在学中の面会、四五年一月二一日の豊橋での最後の別れ、そして同年六月沖縄で戦死するまでの信一郎についての日記を辿るときにも、同じような深い悲しみを覚える。「ご慈愛を尽くされた信一郎さんが戦死をなさいまして、そのころから先生は一そう無口になられたともれ承わり、お心のうち押しはかるべくもありませんが、万感私どもにまでひびくように思われます」[20]という教え子の回想もそのことを伝えている。

3、『嘉信』との関係

手塚と矢内原忠雄との肝胆相照す間柄については、日記中の「嘉信六十号を祝し祈る。アーメン」（一九四三年一月三日）、「聖大日本の柱石たる者はたれぞや、矢内原氏と余となり、亜孟。切に天軍を祈り奉る」（一九四四年七月一〇日）などの大行な記述を通してうかがいうる。和田正牧師は両者の関係について詳しく伝えている。[21] しかし、前述のような聖戦観をもつ手塚と非戦の矢内原が同質の柱石たりえただろうか。その疑問については私は別に論じたので[22]ここではこれ以上触れない。

森下日記に矢内原の『嘉信』が初出するのは意外におそく一九四四年一月三日である。その日に、『嘉信』一九四三年一二月号の記事を抜き書きして「これだけの事を敢えて言ってくれたのには初めて出合った。ありがたい事である」と記している。以後毎号主として九段向山堂で購入したこととそれへの短いコメントがみえるが、同年五月、青山堂で『嘉信』第四巻（一九四一年度）一二冊の旧号をまとめて求めたことを記している（日記、五月一日）。これからも、森下の『嘉信』との出合いは一九四四年一月であったと見ていい。森下は矢内原に共鳴し、矢内原に支えられるところがあったが、矢内原に会うことはもちろん通信することも終始なかったと思われる。むしろ手塚以上に非戦に

ついて矢内原との共通項をもちえたと考えられる森下は、それを自己の内だけにとどめて終っている。森下はそういう孤立した生き方をした人である。

4、対英米戦争観

一九四一年一二月八日、手塚日記。

偉なる哉。畏こき哉、米英に対して戦を宣せらる。十一時也。天佑を保有せらるゝ天皇よ。神霊上に在り。亜孟々々。直ちに敵空軍を撃破す。海軍はよし。亜孟。午後、天主閣に高く祈りに祈る。又城山頭に祈り感謝す。心ゆくばかり也。天下四方請ふ隗よりはじめよ。こゝに一人在り。亜孟々々。あゝ聖書紀年六百六十年、前宣戦より廿七年也。主こゝに在す、この国に在す、この世界に在せり、アーメン。

同じ日の「四拝大詔天佑保有布港星港敵艦盡」と題する漢詩。

仰欽承大詔　民確信天虞　忽盡艨英米　仁邦固敵無

同年クリスマスの「聖誕節香港陥落」の漢詩。

天軍征落々　神意確昭々　一世香湾静　維人粛聖宵

他方、森下は一二月八日は新宿から諏訪への車中にあった。当日の日記。

午前一一時対英米宣戦の詔書下る。戦争は既に前夜開始され、日本軍はハワイ、フィリッピン、シンガポールを襲撃せり。午後四時上諏訪着。今夜中学校宿直なり。午後六時、学校に到る。

森下は一四日終日家居し、国民が初戦の大勝利でうかれていることを批判、この戦争の本質を分析して「永遠の平和を招来せんとするという戦争が永き禍乱となるのである」と結んでいる。

翌年二月一五日のシンガポール陥落を手塚は同日「新嘉坡落つ」と題して次のように詠む。

羌城辺一断　星港不須防　渺望天涯月　風閑俠骨香
長征凱萬里　大戍信風暉　日暮孤回首　燦南十字星

外なる森下は二月一八日のシンガポール陥落祝賀日に式にだけ出て帰宿する。

中学校では午前九時より祝賀式、終って護国神社及び諏訪明神上社参拝、行軍演習。商業学校は午前一〇時より市の祝賀式に参加、続いて祝賀旗行列。余は中学校朝の祝賀式に参列、それだけにて帰宿。午後は中学校四年考査採点。

そして内なる森下は同日続けて次のように記す。

今夜下宿にて祝賀の酒馳走あり。夜、無為。我は正直に我がただ今の心境を記し置くべし。我はこの祝賀日に当って、何ら祝賀すべき歓を感ずる事なし。ちっともお目出度い気がしない。更にうれしさを感じない。

祝賀式では、すでに式辞を述べる立場ではなく、単に列席するだけだったが、かれには気の重い参列だったに違いない。そして半分は参加したが半分は逃避した。時局にかかわらぬただ一回の講演の依頼にもかれは逃げようとしていた。(23)

手塚は一九三六年に退職後、松本日本基督教会を中心に南信の各教会で東奔西走して説教を担当した。そこで説かれた「講説」では、聖戦を聖戦たらしめるためのさまざまな訴えがなされた。たとえば、日本は「大飛を遂げるの時期に際会」し、「只経済進出、武力進出而已では駄目で、道徳を益々進出せしめねばならぬ。その為には日本人の道徳の向上」が必要であり、「その向上には神観の確立」を要すると説く。その神観は「世界神」を拠にすべきであるという。

万軍のエホバ神は、外国神と思ってはならない。エホバは宇宙世界の神であります。日本民族は、古い歴史と尊い使命とを、与へられて来ております。神の選民は、只にイスラエルのみではない。日本人も選民である。従って光栄と責任がある。神への、畏

れかしこみの心を持つ時、個人としても、民族としても、道徳的生活交際が出来、平和、正義、融和が成立いたします。日本の個人の責任、国民の責任、国家の責任を思ふ時、基督教から考へて見る時、ここに神観を確立し、責任を持つことが吾々の愛国心である。[24]（一九四三年一月三日）

手塚は一九三九年以降、穂刈女塾の講師を兼ね、時には校長代理も勤めた。一九四二年九月二二日の日記には「塾へ、大詔を講ず」とある。翌年六月一六日には、首相演説を「天なし」とした後、「乃ち天あらしむるものは誰れぞや。おお、たれぞや。天あり、聖あり、則ち聖戦必聖勝也、亜孟。（中略）ルンガ沖、航空戦、聖勝。輸船七、駆艦一、沈。一破。亜孟」とある。同年七月七日の日華事変記念日に、

聖戦奚疑捷　連征第七年　雲蒸砧望素　血起召南天

と詠み、一九四四年八月八日の大詔奉戴日には、

新秋崇詔日　天賜聖男児　信戦全勝兆　祈真寄一詩

と「勝兆を信じる」手塚が塾で「大詔を講ず」る内容は推定できる。時局に関する手塚の外と内との違いはないわけではない。それは前にも触れた。東条首相に「天なし」と言うときにも、手塚の聖戦観は生き続けている。さらに戦争末期、「現日本の軍部を亡ぼし給へ、信日本は永遠也」（日記、一九四五年五月二八日）という強い言葉が出てくる。これは軍部を国家の賊と断じ、近衛首相に期待した手塚の考え方につらなるが、その軍部の遂行した侵略戦争を手塚の立場から聖戦視して仮託したことの自覚にはつらならない。かれは「心の底からの愛国者」であり、「反戦的思想の持ち主など非常にきらっていた」[25]のも、戦争を聖なるものと信じたからであろう。

手塚が「神国」を連呼して祈っているとき、森下は同様に軍部を追咎するが、もっとわかり易い言葉＝思考によっ

ている。

硫黄島守備隊いよいよ全部玉砕の報あり。忿懣に堪えず。ただごうがわいて仕方がない。敵を憎んで然るのではない。守備隊は無援にして玉砕、攻撃隊は必死体当りより外に方法を持たない所まで追い込んでしまった我が国の軍部に対して余は実に忿懣の情に堪えず。（日記、一九四五年三月二一日）

しかし、かれはこの言葉も人には語らないで日記に一人記すのみである。

5、敗戦期の姿勢

森下は諏中、諏商を辞職した後、東京に戻って西尾実の斡旋で一九四三年三月末日付中等学校教科書編集委員を嘱託され、翌年一二月まで在職、在京した。年末に郷里の上片桐村に帰り、ここでその翌年八月の敗戦を迎え、ここで待望の農業に従事して生涯を終えた。

一九四五年五月のドイツの敗北について森下はたんたんと事実を記した（日記、五月一日・四日）が、手塚は気迫をこめて記している。

唯物の偽独逸滅びて、心霊的哲学宗教の真独逸生きよ。凡そ戦は生みの苦しみ也。（中略）神国大日本はこれよりその姿を現はすべきなり、真日本は不滅也、真独逸も亦永遠なり。而して真とは何ぞ、神のみ、神なき所に真は非るなり、亜孟」

（日記、五月九日）

この前後、かれの日記には「我大日本神国也」の記述が頻出する。八月一五日も対蹠的である。両者を断らないで全文を並記するがその筆者は自明と思う。（傍点は宮沢）

◇晴。疎開学童三名来る。慰安するため今日一日預りたるものなり。午休みに種物（大根・漬菜・葱・人参）配給あり。正午、天皇陛下御自身の御勅諭により無条件降伏の発表放送あり。日本国三千年の光輝ある歴史にここに終わりを告げ、敵米・英・ソ・支

に対し全く敗北したるものなり。
◇水。曇。晴。讃美、感謝、祈祷。絶対の愛祷を蒙るもの也、神国大日本也、信府也、素巷也、亜孟々々。天皇休戦を宣す。亜孟。森有正氏、二村新太郎氏来訪、熱祷を共に捧ぐ七人也、世界を祈る也。祈祷会五名也、亜孟々々。弦月西天にかゝる。嗚、絶対よ、絶対よ。

学童の集団疎開第一陣が上野を出たのは一九四四年八月四日である。手塚はこの直後の八日に次のように詠んだ。

都童三九百　来学満泉林　聖戦新秋日　天開遠岳門

たまたま敗戦直後の八月一九日にも森下と手塚は、「静」なる人と「動」なる人がよく表われる日記を書いている。
◇疎開の児童、先日の礼に来る。昼食を済ませ午後三時帰る。草刈り続行。トマトを収獲し、疎開児童に馳走す。胡瓜に薄肥を施す。野菜一貫二五〇匁供出。胡瓜を供出す。これは疎開児童用なり。
◇日。晴。讃美、感謝、祈祷。絶対の愛祷を蒙る者也、神国大日本也、信府也、素巷也、亜孟。朝百瀬君来訪す。みさを上条家へ。礼拝。伊藤氏へ献金二回分一二、七二渡す。植木女を訪ふ。広丘へ、水穂を訪ふ、快談、痛語す。七時何分下る、約一時間おくる。正一の日也。民平君百日也。

三　結　び

森下は戦後、飯田市追手町小学校教職員を対象とした講演「私の読書遍歴」(一九五二年一二月二七日)のなかで、「戦時中のわたしの卑怯なる態度」と「今までの信仰」について語り、真の信仰に立っていなかったことを告白している。[26] しかし、かれが戦後積極的に語り出したわけではない。依然として語るよりは黙して農業労働に服することが、かれの希求してやまなかった信仰の生活であったことには変化はない。戦後も「静」なる人であり続けた。ただ「卑

怯なる態度」の自覚が表明されたことは注目される。そして、それにふさわしい天皇の戦争責任論や新憲法支持論を、戦時下日記よりやや強い言葉で書き続けた。

手塚の生涯は、言葉においても行動においても気迫に充ちている。戦中と戦後は聖戦鼓吹―神国祈願―聖大学運動と連繋して、かれの自覚的断絶はない。敗戦のその日から「世界を祈り」、戦後社会の師表たるべき言葉と行動があった。

信濃教育会は機関誌『信濃教育』で手塚特集号を二回出している（一九五五年・八二五号、一九七一年・一〇二〇号）。とくに一〇二〇号は評伝―基督者として（一一篇）、教育者として（八篇）、家庭人として（五篇）、追憶（一二篇）、研究（一〇篇）にわたり、その他グラビア、座談、略年譜、編集後記にいたるまで全ページがそれに当てられている。個人が二回にわたってそういう待遇を受けるのは異例なことと思われるが、それは手塚の信濃教育会における大きさを反映しているといえよう。そこに描かれている手塚像はそのことをよく証明する。

しかし、戦時下の手塚について本稿の主題にかかわる点を批判したものは藤田美実の一篇（「『内なる世界』と『外なる世界』」）のみである。部分的に触れて、逆に擁護ないし弁護しているものが三、四篇である。たとえば、手塚は戦争に対して神の審判を期待し、「この戦いは聖戦でなければならない、聖戦に徹せよ、と言われ、日本のために、また敵国民のために、世界平和のために熱烈な祈りをささげておられた」[27]とある。これは手塚の聖戦観を特殊化して擁護するものだが、手塚において果して明瞭にそのことが認識されていただろうか。当時公認の用語をもって手塚の神国観を韜晦するものであるよりは、目前の戦争に自己の理念を仮託していたのであり、その戦争の本質を見抜いていたのではなかった。また、手塚の「講説」から聴衆は時局のいう聖戦と手塚の聖戦とを分離して、異質なものとしてどれ

だけ正確に聴取しえただろうか。熱祷は記録に残されず、それを確かめることはできないが、少くとも記録されたもののなかから「敵国民のため世界平和のため」になされた祈りを発見することは困難である。

戦争は敗けてしまった。聖戦といえるまで、日本は世界中にないように志はあったが敗れてしまった。歴史の教訓を忘れないで、民族の自信を失わない先生自身、日本人で日本を愛し民主主義を歓迎し、平和憲法を愛し独立の精神に立って、依頼心でなく個性を発揚するため、人間の自由と平和のために誤らないようにすると努力された。[28]

これは不可解な文脈の文章だが、手塚に断絶がなかったのと照応する認識を物語る文章である。手塚の問題であると同時に信濃教育会の人びとの手塚的な戦中戦後の連続性をはしなくも明示していると言わなければならない。また、この特集の性質として手塚によっては生かされなかった者の声はついに記録されることはないし、そこに目を向けたものも見出せないのである。

藤田は、手塚像の総体を「存在が教育である」と評価している。[29] あれだけの聖戦アピールが戦後、人びとの胸裡に残留せず、聖者手塚像のみが生きて残ったとすれば、言葉（ロゴス）とは何だろうか。教師の理想のひとつの在り方として「存在が教育である」とすれば、手塚は藤田が指摘したように信濃教育の人びとに対して、存在によって大きな感化力を発揮したことは明らかである。存在感がなかったり、俗悪な存在であったりする場合と対比して見ればわかることである。手塚によって生かされた人びとにとっては、「言葉が消えて存在が生きる」というあり方であったに違いない。信仰に生きた人びとには、インカーネーションに似たものを手塚に見ていたと言えるかも知れない。

他方の森下は、松本高女では言葉にするとき、外と内との背馳に苦悩し、逃避せざるをえなかった。諏訪では多分唯一の講演の機会にも逡巡している。私の場でも日記の言葉を打ち明けることはおそらくなかったことは、回想集を

見ても推定できる。自ら言葉を消してしまった森下の存在は、言葉にはよらない極少の範囲でしか存在できない。そういう表現形態は、かれ自身消極的で忸怩たるものでしかなかったことを十分自覚していただろう。それが「戦時中の卑怯な態度」を告白させたのだと思われる。

本稿は同時代に生きた二人のクリスチャン教師の戦時下日記を通して、それがB型とC型とに分かれ、それぞれ静と動とつながっていたことを指摘することによって、昭和戦時下に生きた二人のキリスト者の人間像に迫ろうとしたものである。人物像としては極少部分に触れたにとどまり、両者の教師像や戦後思想などに及ぶものでもない。

注

(1) 回想の森下先生刊行会編『回想の森下先生』(一九六五年、同会刊)、六七、一〇五ページほかを参照。
(2) 同書、一六八ページ。西尾実、清水義穂編『神と愛と戦争・あるキリスト者の戦中日記』(一九七四年、太平出版社刊)、一五七ページ参照。
(3) 『回想の森下先生』二二一ページ。
(4) 手塚縫蔵遺稿集刊行会編『手塚縫蔵遺稿集』(一九六七年、同会刊)、一六ページ。
(5) 宮沢正典「手塚縫蔵について」前掲書所収、二三二ページを参照。
(6) 小塩力『小塩力神学論集』(一九七九年、新教出版社刊)、二八〇—一ページ。和田正「手塚先生の信仰」(『信濃教育』第一〇二〇号)。その他。
(7) 前掲「手塚縫蔵について」
(8) 高師同期生の寺田喜治郎もそうみている。『回想の森下先生』四六、四九ページ。
(9) 同書、二一ページ。
(10) 同書、三ページ。
(11) 同書、三—四ページ。
(12) 藤田美実『明治的人間像』(一九六八年、筑摩書房刊)、一七二—五ページ。
(13) 稲垣真美『兵役を拒否した日本人』(一九七二年、岩波書店刊)、八六—九八、一三八—一五二ページ。
(14) 宮沢正典「外交評論家の抵抗・清沢洌」『戦時下抵抗の研究Ⅱ』(一九六九年、みすず書房刊所収)、二二三、二二六ページ参照。
(15) 『手塚縫蔵遺稿集』あとがき。
(16) 西尾実「森下二郎君とその生涯」(『信濃教育』第九一九号)。『回想の森下先生』二九七—八ページ。

(17) 『長野県松本蟻ケ崎高等学校七十年史』(一九七一年、同校七十周年記念事業委員会刊)、二七九ページ。
(18) 飯田にいても信一郎を思い(『回想の森下先生』一一七ページ)、麻疹にかかったときには夜中におぶって歩いた(日記、一九二五年五月二八日)。
(19) 『回想の森下先生』五一ページほか。
(20) 同書、一一七ページ。
(21) 和田正「矢内原忠雄先生と手塚縫蔵先生」(『矢内原忠雄全集・月報28』一九六五年、岩波書店)。
(22) 前掲「手塚縫蔵について」
(23) 日記、一九四二年一一月三日、二二日、二三日参照。
(24) 『手塚縫蔵遺稿集』一四二―三ページ。
(25) 「座談手塚縫蔵先生をめぐって」(『信濃教育』第一〇二〇号)。
(26) 『回想の森下先生』二五ページ。
(27) 白上元一「終戦前後の手塚先生」(『信濃教育』第一〇二〇号)。
(28) 松井順一郎「手塚縫蔵先生」(『信濃教育』第一〇二〇号)。
(29) 藤田美実、前掲書、二三六ページほか。